

連載



## はじめの一步



第 21 回

# 親準備期における子育て支援

寺本妙子 Teramoto Taeko

開智国際大学教育学部教授

### 親準備期における子育てに関連する意識と支援

子育て支援は、親の子育て負担を軽減するための支援と親が子どもを育てる資質の向上に関する支援に大別される<sup>1)</sup>。前者には、家庭における子育ての保障や保育施設の量と質の確保、経済的支援、子育てがしやすい環境整備などが含まれる。一方、後者は親(養育者)の子育ての能力を促進し、子育てというライフイベントへの適応を支える支援ととらえられ、親になってからの支援と親になる準備期の支援に分けられる。

子どもや子どもの養育に対する理解や準備性に関連する概念には、「親準備性」<sup>2)</sup>「親性準備性」<sup>3)4)</sup>「次世代育成能力」<sup>5)6)</sup>「養護性」<sup>7)-9)</sup>があるが(表1)、そこに共通する子育てや次世代の養育に対する関心や態度について、筆者は次世代育成意識として包括的に定義した<sup>10)</sup>。この定義には、次世代を育むことへの関心と貢献、相手への慈しみという、人間のポジティブな側面が反映された。また、将来親になる可能性を有するという意味で、親準備期にある大学生の次世代育成意識について、家族属性、性別、親への信頼感との関連が検討された<sup>11)12)</sup>。次世代育成意識は領域によって異なる様相を示し、性別や親への信頼感の影響を受けることが示唆された。時間的展望(過去・現在・未来に対する心理的見解)との関連に関する調査では、肯定的な時間的展望が高い次世代育成意識を支えることが示唆された<sup>11)13)</sup>。

以上の調査から、親準備期の次世代育成意識の関連要

表1 子どもの養育とその準備性に関連する概念

概念	定義
親準備性	子どもが将来、家庭を築き経営していくために必要な、子どもの養育、家族の結合、家事労働、介護を含む親としての資質、およびそれが備わった状態 <sup>2)</sup>
親性準備性	子育てを支援する社会の一員としての役割を果たすための資質 <sup>3)4)</sup>
次世代育成能力	性別にとらわれず、次の世代を育てる能力 <sup>5)</sup> 次世代の子どもたちを育てることへの自信 <sup>6)</sup>
養護性	相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能 <sup>7)-9)</sup>

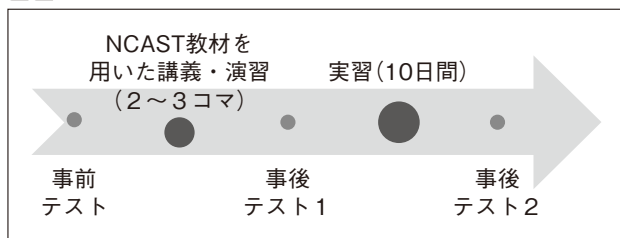
因について示唆が得られた。一方、次世代育成意識を促進する心理教育的な介入、すなわち、前述の「親になる準備期の支援」に関する試みは、わが国の学校教育でも導入された経緯がある。例えば、乳幼児とかがかわる機会を提供する「保育体験学習」(中学生と高校生を対象とする家庭科や技術・家庭科)や、小学生も対象に含めた「子育て理解教育」である<sup>10)</sup>。

### 親準備期の心理教育プログラム

#### 1. プログラムの内容

筆者<sup>14)</sup>は親準備期の支援に注目し、親準備期にある大学生の次世代育成意識を促進する心理教育プログラム

図1 プログラムの過程

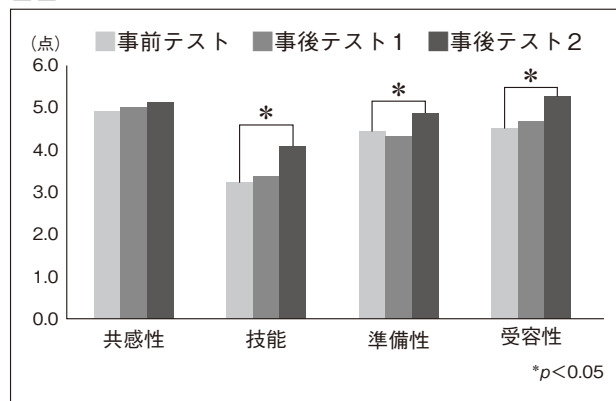


を試みた<sup>14)</sup>。心理学科の授業の一部を活用したこのプログラムにおいて、子育て支援施設に参加したのは14名〔男子4名、女子10名、平均年齢20.50(±0.52)歳〕であった(本プログラムの実施に関しては、筆者の所属機関の研究倫理委員会の承認を得た)。

この心理教育では、子どもや、子どもの養育に対する理解や準備性(関心、態度)の促進が目的とされ、NCAST (Nursing Child Assessment Satellite Training)教材が活用された。NCASTは親子の関係性の理解と支援を目的とし、親子の関係性をとらえるBarnardモデル<sup>15)16)</sup>を理論的背景とする。Barnardモデルでは、良好な親子の関係性を支える子どもと養育者双方の役割・責任が設定され、両者は相互に影響を及ぼすとされる。良好な関係性の構築には、子どものニーズの理解と適切な対応が求められるが、そのニーズの把握には、子どもが発するサイン(cue:例えば、視線、顔の表情、身体の動き、発声・発話など)の読み取りが有効とされる。本プログラムでは、子どものサインに関する教材であるBabyCues<sup>17)</sup>や、親子の遊びを通じた学びの相互作用プロセスを模式化した概念であるTeaching Loop<sup>15)16)</sup>、抱っこによるスキンシップなどの日常生活における親子の関係性の理解を促す教材であるPromoting First Relationships<sup>18)</sup>も活用された。

プログラムの流れは図1のとおり、NCAST教材を用いた講義・演習前の事前テスト、終了後の事後テスト1、子育て支援施設での実習後の事後テスト2という3回のアセスメントが含まれた(NCAST教材を用いた講義・演習はNCASTのPCIインストラクター有資格者が担当)。講義・演習の内容は、乳幼児精神保健の概要、子育て支援の概要、親子の関係性の理解と支援、子どものサインの理解と対応であった。本プログラムでは、教育

図2 養護性尺度の平均得点の推移



的介入の事前・事後のアセスメント結果の比較によって介入効果を評価するという準実験デザインが採用された。アセスメントには、6段階評定25項目で構成される養護性尺度<sup>9)</sup>が使用された。この尺度には、「幼い子どもに対する共感性(以下、共感性)」「幼い子どもに対する技能の認知(技能)」「親への準備性(準備性)」「子どもの非受容性(得点を逆転化して受容性とした)」の4下位尺度が設定され、高得点ほどその程度が高いとされた。

## 2. 分析結果

養護性尺度の平均得点の推移を図2に示した。いずれの下位尺度でも、事前テストより事後テスト2のほうが高い得点を示していたが、一要因被験者内分散分析(Bonferroniによる多重比較)の結果、技能、準備性、受容性において、事前テストと事後テスト2の得点間に有意差が認められた( $p < 0.05$ )。この結果は、ベースラインより介入後の得点が上昇したことを示し、本プログラムが有効である可能性を示唆するものであった。実習後の得点において有意な上昇が確認されなかった共感性に関しては、ベースラインにおける高水準が関与しており、尺度の天井効果(最高点に近く、天井につかえている状態)が考えられた。天井効果のために参加者の特性が十分に把握されなかった可能性があり、より適切な尺度使用の必要性が示唆された。

## 3. 参加者の実習後の振り返り

実習先の子どもとの関係性の構築が「よくできた」「だ

「いたいできた」と参加者の9割が回答した。関係性構築に関する良好な場面については、「抱っこしたり、手をつないだりしているときや自分と子どもの目が合っているとき」「一人遊び(積み木やままごと)に加わってみることで、その子の遊び方や大人に対してのかかわり方が少し見えるので、そのようなときにスムーズにこちらもかかわれた」といった回答が得られた。逆に、関係性構築が困難な場面については、「言うことを聞いてくれない子にいろいろなアプローチをしても聞いてくれなかったとき」という回答が得られた。

子どものサインの読み取りに関する自己評価においては、約8割が「よくできた」「だいたいできた」と回答した。サインの読み取りが良好な場面については、「長時間一緒に過ごすことで、わずかな表情の変化がわかるようになったとき」「子どもの言葉だけでなく、行動や仕草にも注目することが大切であり、そのようなことを注意することでスムーズにかかわれた」という回答が得られた。実習前の講義・演習において体験した、子どもとの関係性の構築や子どものサインの理解と対応に関するNCAST教材を通じた学びが、実習場面でも有効に機能していたことが示唆された。

#### 4. プログラムの有効性

以上のように、本プログラムの有効性が示唆されたことから、子どもや、子どもの養育に対する理解や準備性を促進させるといふ本プログラムの目的は達成できたと考えられた。しかし、対象者が限定されていたことから、一般化の可能性については、さらに慎重な検討を重ねることが必要とされた。

#### 親準備期の子育て支援の意義

最後に、親準備期の子育て支援の意義について考察する。親準備期の支援は、将来親になったときの適応を支える予防的効果が期待できるが、それとは異なった観点から意義を見出すことも可能である。親になる前の段階

で、子どもや子育てに対する理解や準備性を育むことは、自分の将来を模索する内的作業でもあり、「ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)」を意識したキャリア発達を支援する試みとも関連する。親準備期の子育て支援の文脈は、同時に、親準備期世代の生涯発達支援の文脈とも重なり得ることから、双方の視点を取り入れた検討も今後は必要になると考えられる。

#### 【文献】

- 1) 蘆田智絵：nurturance (養護性)の概念に関する理論的考察。学習開発学研究 3：83-90, 2010.
- 2) 岡本祐子, 古賀真紀子：青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析。広島大学心理学研 4：159-172, 2004.
- 3) 伊藤葉子：中・高校生の親性準備性の発達。日家政会誌 54：801-812, 2003.
- 4) 伊藤葉子：中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討。日家政会誌 58：315-326, 2007.
- 5) 原ひろ子, 館かおる・編：母性から次世代育成力へ；産み育てる社会のために。新曜社, 東京, 1991.
- 6) 菱谷純子, 落合幸子, 池田幸泰, 他：青年期の次世代育成力尺度の開発とその検討。母性衛生 50：132-140, 2009.
- 7) Fogel AD, Melson GF・著(小嶋秀夫・編, マカルピン美鈴・訳)：子どもの養護性の発達。乳幼児の社会的世界, 有斐閣, 東京, 1989, pp 170-186.
- 8) 小嶋秀夫：養護性の発達とその意味。小嶋秀夫編, 乳幼児の社会的世界, 有斐閣, 東京, 1989, pp 187-204.
- 9) 棚澤令子：青年期・成人期における養護性の発達と形成要因。風間書房, 東京, 2012.
- 10) 寺本妙子：大学生を対象とした次世代育成に関する心理教育の実践と評価。日本橋学館大学紀要 14：25-35, 2015.
- 11) 寺本妙子：科学研究費助成事業研究成果報告書(課題番号24590814)。2016.
- 12) 寺本妙子, 柴原宜幸：大学生の次世代育成意識とその関連要因。日本橋学館大学紀要 14：3-13, 2015.
- 13) 寺本妙子, 柴原宜幸：大学生の次世代育成意識と時間的展望の関連。日本橋学館大学紀要 14：15-23, 2015.
- 14) 寺本妙子：NCAST教材を活用した次世代育成に関する心理教育の実践と評価：実習を取り入れた実践についての検討。開智国際大学紀要 16：55-66, 2017.
- 15) Sumner G, Spitzel A：NCAST；caregiver/parent-child interaction teaching manual. NCAST Publications, Seattle, 2004.
- 16) 廣瀬たい子・監訳：養育者/親-子ども相互作用；ティーチングマニュアル(日本語版)。NCAST研究会, 東京, 2006.
- 17) NCAST programs：BabyCues；A child's first language. <http://www.ncast.org>
- 18) Kelly JF, Zuckerman TG, Sandoval D, et al：Promoting first relationships. 2nd ed., NCAST Publications, Seattle, 2008.